

「炭鉱地帯病院」小論

木村幸雄

一

「炭鉱地帯病院——その訪問記——」は、昭和四年八月発行の「文芸都市」に発表され、翌年四月に刊行された井伏鱒二の第一創作集『夜ふけと梅の花』に収められた。《新興芸術派叢書》の一冊として出された同作品集のなかでは、プロレタリア文学的な素材を取りあげて描いている点で異色の作品となっている。ある炭鉱地帯病院で発生した一人の少女の不幸な死というプロレタリア文学向きの素材を、井伏独自の観点から、さまざまな創作方法を駆使しながら描いているところが注目される。

「その訪問記」というサブタイトルからうかがわれるように、「私」という語り手が、ある炭鉱地帯病院を訪問して、そこで見聞したところを記録するという一種の見聞録のスタイルで書かれている。

まず、その語り手であり、視点人物である「私」が、どういう人物として設定されているかに注目してみたい。年齢も、性別も、住所も記されていない。そういう実体的な属性はすべて捨象されている。いわば機能的な人物として設定されている。訪問者となっているが、その訪問の動機も目的も明らかにされていない。ただひたすら病院で起った一人の少女の痛ましい死と、それをめぐる人々の反応について、見

聞したところを記録するといういわば書記的な役割を果している。そういう「私」が、病理解剖室の解剖台の上に、一人の少女の裸体が置かれているのを目撃するところから書き起こされている。

病理解剖室の解剖台の上には、一人の少女の裸体が上仰けに置いてあって、おそらくこの裸体の死亡原因(?)となつたであらう一部分にだけ一枚のガーゼが載せてあつた。ガーゼは約そ四寸四方のものにすぎなかつたが、若しこれつぼちの布ぎれでもそこに覆つてなかつたならば、私はドクトル・ケーターの談話に身を入れて聞くことができなかつたであらう。

この冒頭部が、「炭鉱地帯病院」の悲劇の核心部を凝縮して呈示する光景となっている。そのなかに、少女の死亡原因とそれをめぐる人々の心づかいが、きわめて暗示的に描き込まれている。

その少女の死亡原因とそれをめぐる人々の反応を、「私」が、医師、父親、看護婦から聞きとつたところを語って行くのが作品の展開となっている。「私」は、医師、父親、看護婦という順に、個別に別々の場所で彼らの談話を聞いている。ところが、彼らが「私」に語る内容は、三者三様に異なり、くい違っている。なぜそういうことになるのか、そこにどういう仕掛けがあるのかがこの作品の一つの問題点となつて

いる。

解剖室で医師が語ったところによると、少女の死因は、田舎から炭鉱技師長のところに女中奉公に出て来た彼女が、技師長に犯された際に負った傷から発症した背椎骨膜炎である。荒くれた炭鉱地帯では、そのような悲惨な事件や事故が相ついで起こっているという。しかし、そういうことを社会問題として取りあげようとは思わないと言う。そして、「私は外国から渡来した一箇の医者です。社会が動かないのは私のせるではありませんまい」と自己弁護するのが習慣になっていると言う。だが、今回の事件では、娘の死を悲しむ父親の大きな泣声が、「治療法以外のことを回避してゐる私の習慣を唆かして、少し脱線させた」とももらしている。これは後で明らかになることだが、訴訟を起こすための診断書を書いてやっているのである。医師の言によると、彼は訴訟を起こすことを父親に教唆しなかつたが、看護婦がこの問題は是非とも裁判沙汰にすべきだと過激に主張したと証言している。

つぎに、「私」は控室で娘の父親に会つて話を聞いている。父親は、六十歳ばかりの百姓ていの人物である。礼儀正しい服装をしているが、身につけているものが地主からの借りものであることは一目でわかる。彼は、「最も辺鄙な田舎の言葉」を用いて話したので、「私」がそれを標準語の「雑報的な文章に翻訳して」記している。

社会の制度といふものは大地と同じく動かすべからざるものです。若し私が種々なる問題を言詮してそれを社会の問題とするならば、私なる人間は制度に対して喧嘩をしまむけるといふものです。しかし私は、いかなる場合にも喧嘩は好みません。私達は不幸といふものに慣れてゐます。たゞたゞ私達は、不幸が私達にむかつて色彩強く押し寄せて来た時には、能ふる限り嘆けばよろしい。ラメンティシヨンのみが私達に与へられた自由です。

父親の語るところによると、ドクトル・ケーターが、「今度の出来事

は十分に社会的問題であるから是非とも訴へる」と申され、訴訟用の診断書も無料で作つて下さつたが、自分は訴訟などしないことに定めていると言う。そして、その理由として、さきに引用したような思想・心情を吐露しているのである。

最後に、「私」は屋上庭園で看護婦の話を聞く。彼女は職業柄口のかなまでクレゾール石鹸くさい女で、東京言葉をつかつて饒舌をふるう。彼女が語るところによると、自分は一人の看護婦にすぎず、それに婚期を遅らしているので世間ていをおとなしく見せる必要があり、父親に訴訟を勧めるようなことはしてはいない。が、父親は「是非とも訴へなければ承知できない」と言つて、診断書を作つてもらつていたと証言している。

このように、「私」が医師、父親、看護婦から聞きとつた話の内容は、三者三様に異なり、くい違つている。整理してみると、三人は三人とも自分は訴訟を勧めるものではないと自己弁護している。そして、訴訟の発起人としてそれぞれに異なる他者をあげている。医師は看護婦をあげ、父親は医師をあげ、看護婦は父親をあげている。これはまさに発起人のたらい回しである。誰が本当に発起人だか分からなくなっている。

この点について、前田貞昭氏は、「円環状をなすこの三つの述懐は、前場の発言者の言葉を全面的に否定し、その訴訟への積極的姿勢を暴露するのである」と指摘しているが、ここにはそれだけでは説明のつかない仕掛けがかくされているのではなからうか。後になって、父親が「私達の訴訟計画」と語つているところから推察すれば、三人は訴訟を起こすことをめぐつて共同謀議をすすめていたということになる。だとするならば、仕掛けのポイントは、謀議の首謀者・訴訟の発起人をかくしているところにある。この構造は、江戸時代の農民が、上訴や一揆を起こす際に作つた「傘連判状」の構造に似ているところがある。同一目的のもとに盟約した仲間たちが、発起人をかくすようにかばいあいながら結束を固めるために作つたというあの「傘連判状」の

構造に似ている。

一一

「炭鉱地帯病院」は、さきに見てきたように医師、父親、看護婦が「私」に対して、三者三様に異なる陳述をする場面と、最後に一同が応接室に集った席で父親がやる「テーブル・スピーチ」の場面とから構成されている。父親のスピーチは、つぎのように「翻訳」されている。

こ、に同席なさるこのかた（私のこと）に一言申し述べます。このかたは私達が訴訟の計画を正直に告げなかつたといふやうな意味のことを、ぶつぶつ呟いてゐられるやうですが、それは私達を責めるといふものです。その責め道具として何だか三つの外国語を用ひたりなさいましたが、人々のテンダネスを虚偽として指摘する立場へ自分を推薦なさる態度は、いかななものかと思ひます。さういふやうなことをする人の忠告は贋造紙幣に似てゐます。

「私」から見れば、「虚偽」と見えるものが、実は「人々のテンダネス」なのだというのが、父親の言い分なのである。そして、そういうことも理解しないままに、自分達を責める立場に立とうとする「私」の態度をたしなめ、そういう人の忠告は、「贋造紙幣」に似ているとつき放している。

ところで、さきに見てきたやうな三者三様に異なる陳述と、この父親の最後のスピーチとのつながりがわかりにくい。このところにこの作品のもう一つの問題点がある。その点について、前田氏は、三つの述べ懐と最後の「テーブル・スピーチ」との間にある飛躍が、納得いくようには埋められていない、そこにこの作品の「謎」と「奇妙さ」⁽¹⁰²⁾とが見られると述べている。

そこでその飛躍を埋めることをこころみてみたい。まず、三つの述

懐と最後の「テーブル・スピーチ」とをつなげる役割を果しているのは主人公の父親である。父親は、三人の述べ懐を統括する立場に立つて最後のスピーチを行なっている。彼は、「私」という主語ではなく、「私達」と複数の主語を用いてスピーチを行なっている。それまでに三人が、「私」に対して三者三様に異なる陳述を行なってきたことは、「私」の立場からすれば、「虚偽」ということにならう。しかし、「虚偽」と「真実」とをなげきませにして語られた三人の陳述のなかくされている「人々のテンダネス」こそが、人間的な「真実」なのだということ語っているのが父親の最後のスピーチなのである。さきにあげた「傘連判状」の構造も、そういう「人々のテンダネス」から編み出されたものにほかならなかつたのである。そういう関連で、三つの述べ懐と最後の「テーブル・スピーチ」とは深いところでつながられているのである。

三二

「炭鉱地帯病院」には、「ラメンテイシヨン」と「テンダネス」という二つの外来語が、炭鉱地帯の闇に生きる人々の心の世界に照明をあてる二つの光源のように象徴されている。「ラメンテイシヨン」は、父親の述べ懐を「私」が「雑報的な文章」に「翻訳」したものものなかにめ込まれている。「テンダネス」は、「テーブル・スピーチ」のなかに眼目とし出でくる。それぞれ、述べ懐とスピーチの核心に迫るキーワードとなつている。

「不幸が色彩強く押し寄せて来た時には、能ふる限り嘆けばよろしい。ラメンテイシヨンのみが私達に与へられた自由です」と父親が述べ懐しているところをとらえて、熊谷孝氏は、そこに「農民の哲学」、あるいは「東洋哲人のラメンテイシヨンの哲学」がうかがわれると言う。そして、それを「幾世代にわたって痛めつけられて来た農民の心情を反映したもの」と見なしている。⁽¹⁰³⁾

しかし、父親が「社会の制度といふものは大地と同じく動かすべからざるもの」という社会観をふまえて述懐する「ラメンテイションの自由」という思想・心情は、あきらめや泣き寝入りにとどまるものではない。「ラメンテイションの自由」の行使が、本人の思わくを超えて、人々の心を動かし、社会制度にゆさぶりをかける原動力となることもある。「炭鉱地帯病院」においては、娘の不幸な死を能ふる限り嘆く父親の「ラメンテイションの自由」の行使が、医師や看護婦を動かし、訴訟を起こす計画を立てる方向へ向かわせている。そのことは、医師の談話からうかがわれる。娘の臨終に立ち会った父親が、医師を驚かすほどの大声を張りあげて泣き、その泣き声が、治療法以外のことは回避し、社会問題などにはかかり持たないようにして来ているふだんの習慣から医師を逸脱させ、訴訟用の診断書を書かせることになったという。つまり、「ラメンテイションの自由」の行使が、「人々のテングネス」をさそい出し、社会的な行動へかきたてる原動力となっているのである。

このように、父親が語る「ラメンテイションの自由」というものは、最後のスピーチで述べられる「人々のテングネス」へとつながられている。このばあい、「テングネス」という言葉には、たんに「親切」とか「愛情」とかいう意味ばかりではなく、「優しさ」、「柔らかさ」、「心づかい」、「弱さ」などという意味も複合的にふくまれているようである。

たとえば、ドクトル・ケーターの言動には、そういう複雑な意味をふくんだ「テングネス」が現われている。医師は、少女の事件を社会問題として取りあげることに加担しようとしないうる自分の態度について弁明する際に、コップの水の「表面張力」のたとえを出している。コップからあふれ出ようとする水を、あふれ出ないように調節しているのが「水の表面張力」というものであるが、そういう一種の力が社会の現実にもはたらいている。炭鉱地帯の現実のなかには、この少女の事件ばかりではなく、悲惨な事件や事故があふれるほどに起こって

いるのだが、それを社会問題として外へあふれ出ないように調節している「表面張力」にあたるのが、「私達の虚偽や弱さ」なのだという。「虚偽や弱さ」と言うからには、それを本心から肯定しているわけではあるまい。それを「虚偽や弱さ」として否定しようとしても容易には否定しきれない現実の重さを知りつくしている者の言い草にちがいない。だから、「虚偽や弱さ」に忸怩たる思いをいだきながら、「私は外国から渡来した一箇の医者です。社会が動かないのは私のせりではありますまい」という言い逃れをする習慣を身につけてきているのである。にもかかわらず、さきに見てきた通り、父親の「ラメンテイション」に動かされてそういう習慣を破り、訴訟用の診断書を書いてやっている。つまり、そういう屈折した形で、さりげなく現わされるのが「人々のテングネス」というものである。

そのことは、看護婦の態度にも見られる。彼女は「私」に対して、「生命の五奴説」という虚無的な生命観を語っているが、少女の痛ましい裸体の一部に一片のガーゼをのせるというやさしい心づかいをも示していたのである。

そういう彼等の言動は、外部から表面だけを見れば、「私達の虚偽や弱さ」という「表面張力」のかけに立てこもるものに見えるにちがいない。しかし、その裏には、そういう「表面張力」を破ってあふれ出ようとする「テングネス」という人間的な真実がかくされているのである。そして、そういう「人々のテングネス」は現実に押しつぶされた人間があげる「ラメンテイション」の声に深く共感するところから生まれるものである。もし「ラメンテイションの哲学」と言うならば、それが井伏流の「ラメンテイションの哲学」なのだと言えよう。

そして、それは井伏独自の「現実」観に根ざしている。「炭鉱地帯病院」を発表したのと同じ号の「文芸都市」の巻頭言として、井伏は「なつかしき現実」という短かい文章を書いている。その書き出しに、「現実といふものは甚だ愚昧なる風貌を装つてゐるが、彼女は必ずしも愚昧ではない」とある。この言葉は、そのまま「炭鉱地帯病院」の登場

人物たちの言動についても言えるのではなからうか。

四

「ラメンテイシモン」(lamentation＝悲しむこと)と、嘆くこと)、「テンダネス」(tenderness＝親切、愛情、思いやり、柔らかさ、穏やかさ、弱さ)という二つの外来語が、父親の述懐と「ティブル・スピーチ」のキーワードとなっていることはさきに見て来た通りである。しかし、これらは「私」が父親の田舎言葉を「雑報的な文章」に「翻訳」したもののなかに出てくる言葉であって、もとの田舎言葉がどういうものであったかは明らかにされていない。したがって、これらは「私」が父の田舎言葉を理解し、それに「私」なりの解釈を加えた言葉として受けとらなければなるまい。言いかえれば、「私」は父親が語る田舎言葉とそれにこめられている思想・心情とを理解でき、そしてそれを「雑報的な文章」に「翻訳」できる能力をそなえた青年、すなわち作者井伏に近い知識人青年として設定されていることにならう。

ところで、ふつう「翻訳」と言えば、外国語を日本語に訳すことであるが、井伏鱒二にとってはここに見られるように、百姓おやじが話す田舎言葉を外来語まじりの「雑報的な文章」に訳述することもまた一種の有意義な「翻訳」なのである。井伏の回想によると、『夜ふけと梅の花』に収められている作品を書いたころ、新しい小説の書き方をさぐるために、人物に田舎言葉で会話させてみたり、文章を翻訳調にしてみたり、さまざまなかころみを苦心してやっていたという。そういう苦心のあとは、「炭鉱地帯病院」にもうかがわれる。ドクトル・ケーターの談話は、奇妙な外人なまりの日本語でなされており、いかにもその人柄にふさわしい語り口となっている。看護婦は、東京言葉をつかおうとつとめながら饒舌をふるっている。そして、父親が語る田舎言葉は、「私」によって、「雑報的な文章」に「翻訳」されている。

この田舎言葉を標準語に「翻訳」するというところに、文章文体のこ

ころみのほかに、どういう意義が見出されるのであろうか。それを考えるうえで参考となる作品に、「言葉について」という風変りな小説がある。それは、ある島を訪れた「私」が、そこで出会った少女や少年の田舎言葉をそのまま記録し、それを標準語に訳述していくという書き方で書かれている。そういう書き方が、田舎言葉で話す登場人物の人柄や心情をそのまますくいあげ、それを標準語に訳述することでより普遍的な意味をもつものとして描き出すために意図的に用いられている。この「炭鉱地帯病院」においては、父親が語る田舎言葉そのものは記されていないが、それにこめられている父親の思想・心情に、「私」の「雑報的な文章」による「翻訳」を通じてより普遍的な表現が与えられている。そして、その「翻訳」のなかに用いられている「ラメンテイシモン」と「テンダネス」という二つの外来語が、父親の思想・心情の核心部を引き出すキーワードとなっている。そういう点では、「私」の役割は「訪問者」や書記にとどまるものではなく、「翻訳者」として父親とかかわりあう存在となっている。その「私」が最後のところで「贋造紙幣」に似ているとつき放されているところに、井伏の知識人作家としての厳しい自己批判がうかがわれるのではなからうか。つまり、「私」がそういう役割を果し、そういう存在となることによって、主人公の父親とともに、「炭鉱地帯病院」の構造と主題とをささえているのである。

五

『夜ふけと梅の花』には、「炭鉱地帯病院」の他にもう一編、「生きた」といふ(『近代生活』昭和5・1)というプロレタリア文学向きの素材を取りあげて描いた作品も収められている。それらの制作に当たって、井伏鱒二は、当時最高潮にあったプロレタリア文学の動向を強く意識していたにちがいない。そして、あえてそういう素材に挑戦しながら、それにプロレタリア文学とは異なる観点からアプローチし、新

しい創作方法を開拓するために、さまざまな工夫苦心をこらしていたにちがいない。

東郷克美氏は、井伏鱒二の初期の現実認識をみる上で重要な作品として「炭鉱地帯病院」をあげ、「プロレタリア文学的な素材をとりあげながら、井伏の革命運動への批判、社会は動かないという観念」や「人間の生命を自然のペースベクトイブの中で相対化して眺める傾向」による「諦念」が見られるという見解を出している。しかし、初期の井伏の現実認識のなかに認められる。「社会は動かないという観念」や「人間の生命」に対する「諦念」が、「炭鉱地帯病院」のなかに見出されるという点については、これまで述べて来た論旨からして、私には賛同しがたいところがある。そこで、プロレタリア文学とのかかわりから、「炭鉱地帯病院」や「生きたいといふ」を見なおしておきたい。井伏鱒二とプロレタリア文学とのかかわりをみる上で、「鱒二への手紙」（「文芸都市」昭和3・10）が注目される。これは、「文壇時評」を書くようにすすめられたが、それは書けないので、それにかえて「身辺雑記」を書いてみたと称する小品である。そういう制作事情を反映して、「身辺雑記」風なものなかに、「文壇時評」風なものを織り込んだものとなっている。

以前の友人のほとんどプロレタリア文学運動に加盟したが、「私だけが加盟するのを失念してしたのである」と書き出されている。この書き出しからして、「身辺雑記」を装いながら、当時多くの作家たちがあいついで左傾して行ったという文壇の風潮にふれるものとなっている。「加盟するのを失念してみた」というのは井伏流のとはけで、友人たちの勧誘を拒んで、自分独自の文字の孤塁を守りつづけていたというのが本音であろう。そういう本音を正面から主張することは避けて、からめ手から弁明するという工夫がこらされている。

「鱒二への手紙」というタイトルからうかがわれるように、叔父鱒二と姪里子との往復書簡という形式をかりて、いわば一種の書簡体小説として書かれている。姪の里子は、同郷の親戚の娘で東京に出て来て

いる女子大学生であるが、近ごろ時代風潮にかぶれて左傾し、左翼闘士を気どるようになり、叔父鱒二のところへしきりにプロレタリア文学への転換をすすめる手紙をよこす。その手紙を読んだ鱒二叔父は、左翼かぶれの姪が、根なし草のとりとめのない人間、「智識のプチブル」になってしまったと嘆き、「自分の一族のもの、間に遅ればせのモダンガール」が現われたと面くらっている。モダンガールと左翼娘と言えば、時代風潮から見れば右と左というふうに関係するものとして見なされるものだが、井伏の目には、同根のたよりないものとして映っていたのであろう。

そういう姪に対し叔父の立場から、日々の自分の生活を大切にせよ、故郷の暮しのこまごまとしたこと——姪の姉が赤ん坊を産んだこと、祖父が鼻の手術をしたこと、家を改築したことなどに目を向けよとさとしていっている。そこらに、自己の文学的立場を正面から主張するようなことは避けて、本音をからめ手からそれとなく表明するという工夫がこらされているのではなからうか。

「鱒二への手紙」のなかで、もう一つ注目したいのは、姪の手紙のなかに、「室生犀星氏さへも、中野重治氏のプロレタリア小説を激賞されました。私達もあの作品は激賞しなくてはなりません」という一節がおり込まれているところである。ここにとりあげられているのは、当時発表されたばかりの中野の「春さきの風」（戦旗「昭和3・8」）のことである。こういうところにも、「文壇時評」的な側面がおり込まれている。姪の「激賞」をただちに井伏の賞賛ととるわけにはいかないが、井伏は「春さきの風」を注目して読み、共鳴するところがあったにちがいない。「三・一五事件」のなかで赤ん坊を死なせた一人の労働者の母親が、その悲しみの底からあらためてたたかいに立ちあがって行く姿が描かれている。そのなかに、たとえば死んだ赤ん坊の葬式の場面などに、庶民生活のなかで伝統的に受けつがれてきている風習などがある。こまごまと描き込まれている。そういうところに、井伏は共感するところがあったのではなからうか。

そういう工夫が、「炭鉱地帯病院」にもほどこざれていると見るべきであろう。プロレタリア文学向きの素材をとりあげながら、その登場人物たちは、いずれも階級的な観点からではなく、庶民的な観点——それぞれの日々の暮しにしばられ、そのなかで身につけた習慣にしばられながら日常の生活を営んでいる者の観点から描かれている。ドクトル・ケーターは、外人なまりの奇妙な日本語をあやつりながら日々病人や怪我人の治療に専念し、「私は外国から渡来した一箇の医者です。社会が動かないのは私のせみではありませんまい」と言い逃れをする習慣を身につけている田舎医者として描かれている。娘の父親は年老いた百姓おやじで、「社会の制度といふものは大地と同じく動かすべからざるもの」という「古い百姓イデオロギー」にもとづいて、「ラメンテイションのみが私達に与へられた自由です」という意味のことを田舎言葉で述懐している。また、東京言葉をつかつて虚無的な生命観を喋る看護婦は、日々患者に接する職業から病院の臭いが口の中までしみついているオールド・ミス、婚期を遅らして保身的になっている女として描かれている。

しかし、このように登場人物たちを庶民的な観点から描く井伏の本音は、これこそが現実生活に生きる庶民の本当の姿なのだというところにあるのではあるまい。また、「虚偽や弱さ」のなれあいのなかで、社会問題にかかわろうとしないのが、庶民の本質だとあばきたるところにあるのでもあるまい。まして、「社会の制度といふものは大地と同じく動かすべからざるもの」という観点からあきらめのすすめを描こうとしているのではあるまい。そうではなく、そういうふうな日々の暮しにしばられ、身につけている習慣にしばられて生きている庶民たちが、耐えがたい不幸に襲われて嘆く「ラメンテイション」に心を動かされ、「テンダネス」によって結ばれ、社会的な不正義に対して抗議に立ち上がることもあるのだというところに、井伏の本音を聞くべきではなからうか。

『夜ふけと梅の花』には、「炭鉱地帯病院」と同じく、プロレタリア

文学的な素材を取りあげながら、それを独自の観点と創作方法をもつて描いたもう一つの作品「生きたいといふ」が収められている。

主人公は、造船所のペンキ塗り職工の妻である。夫のところへ弁当を届けに来て、船のデッキから転落して瀕死の重傷を負う。全身に繻帯を巻かれ、組合の活動家と思われる男につきそわれて病院に運び込まれて来る。男は、会社に治療費や葬式代を出させるために、医師に診断書を書いてくれと頼む。女自身は、口から血を噴きながら、「死な、いぞ、死な、いぞ!」とくり返し叫びつづけ、生きたいという彼女の意志を最後まで頑強に主張しつづける。その彼女の悲痛な怒鳴り声を聞いて、「あたりの人々は、それぞれその心をスパイク」される。

このような労働者の妻の悲痛な叫びを、プロレタリア文学ならば、階級的な観点から社会的な抗議の叫びとしてとらえて描くところであるが、井伏はそれとは別の観点から、人間の自然的な生命の叫びとして描いている。その描き方にも細心の工夫をこらしている。

ペンキ塗り職工とスエッタアを着た男とは、彼女を見つめることを断念して、窓のところへ行き、外を眺めた。彼等は二人ならんで、行儀よく両手を窓の敷居に置いた。窓の外には夕暮れどきの原つばに二匹の牝牛がゐて、この家畜は、すでにうす暗く見える向うの山の方角へ首をのぼして鳴いた。恰も、その山の中腹に一つの洞穴をほるつもりであるかの如く、家畜はその太い声で鳴きつづけたのである。

これが作品の結末の場面であるが、ここにおける一頭の牝牛の登場はいささか唐突である。この牝牛は、ペンキ塗り職工の妻の悲惨な臨終を嘆き悲しんで鳴きつづけているのであろうか。あるいは、死に至るまで「死な、いぞ、死な、いぞ!」と叫びつづける女の悲愴な姿の象徴として登場しているのであろうか。

それはともかく、これはまるで一幅の絵のようにあざやかに描きあ

げられた結末である。作品を観念的な思想でしめくくることをさげ、象徴的な一枚の絵で結んでいる。妻の死を覚悟したペンキ塗り職工とつきそって来た男とが、窓のところに並んで眺めている外の光景には、病院内の光景が拡大して投影されている。夕暮れどきの原っぱに一頭の牝牛がいて、暗い山の方に首をのぼして、山の中腹に洞穴を掘るつもりであるかの如き太い声で鳴きつづける姿に、病院の中で「死な、いぞ、死な、いぞ！」と臨終の叫び声をあげつづける女の姿が拡大され、象徴化されて重ねられている。その姿を二人の男が同情と敬意とをこめて、行儀よく両手を窓の敷居に置いて眺めつづけている。

こういう結末のつけ方が、社会的事件として追求すべき観点を、自然的なパースペクティブの方へそらしているという批判を受けることは避けられないだろう。しかし、自然的なパースペクティブへの視点の転換が、生命のはかなさやあきらめへと目をそらすことになるとは限らない。ここでは、「生きたいといふ」人間の生命への執着と意志とを、自然の生命の欲求へと掘り下げてとらえる方へ目を向けているのである。つまり、プロレタリア文学的な素材を取りあげながら、プロレタリア文学であるならば、「生きたいといふ」人間の生命への欲求をもっぱら社会的なものに結びつけて追求するはずのところを、井伏は観点をずらして、自然的なものに結びつけてとらえ直しているのである。

「炭鉱地帯病院」や「生きたいといふ」の制作に際して、井伏鱒二が、一方にプロレタリア文学の動向を強く意識しながら、あえてプロレタリア文学的な素材を取りあげて描くところに挑戦していたことは明らかである。そういう素材を取りあげて、プロレタリア文学とは異なる自己独自の文学世界を切り開くためには、独自の視点と創作方法とを確立する必要があるだろう。そういうところみの産物として、「炭鉱地帯病院」や「生きたいといふ」のような異色の作品が生まれたのである。

(注) 1 前田貞昭「炭鉱地帯病院」管見——「私」の機能と作品構造をめぐって

(二)国文学放「昭和61・3」

(注) 2 (注) 1に同じ

(注) 3 熊谷孝「井伏鱒二(鳩の森書房 昭和53・7)

(注) 4 東郷克美「井伏鱒二素描——「山椒魚」から、「遙拝隊長」へ——」(「日本

近代文学」第五集 昭和41・11)